

『エリスは豊太郎のことを愛していなかった』

私が『舞姫』を読み終えた時、「この作品にはエリスが豊太郎のことをとても愛していたかのように描かれているが、それは豊太郎自身の考えでありエリスが豊太郎のことをどのように考えていたかはエリス自身にしか分からないのではないか。」という疑問が浮かんだ。

そこで私が考えるのは、エリスは豊太郎のことを愛していなかった、つまりエリスは貧しい一家を支えるために豊太郎を利用したということである。

まず、エリスの一家ではエリスの父が亡くなり、明日にも父を葬式に出さなければならないという状況であるのにも関わらず、家には一銭の貯えもなく、助けてくれるだろうと思っていたビクトリア座の座長ですら弱みにつけこまれて無理な要求をされ、エリスは通りで泣く。

しかし、これは辛いや悲しいという感情から泣いているのではなく、道を通る誰かに助けを求めようとして泣いていることが分かる。

なぜなら、見ず知らずの他人であり、しかも外国人である豊太郎に話しかけられたことに少しも驚かず、その上その他人に自分や一家の状況を詳しく説明し、「我を救非たまへ、君。金をば薄き給金を割きて返しまゐらせん。」といきなりお金を貸すよう要求しているからだ。

このことから、エリスは人通りのある場所で泣いていれば誰かが声をかけて助けてくれるだろうと計算して泣いていたことが分かる。

次に、豊太郎は免官になったが、友人である相沢のおかげで豊太郎は新聞社の通信員の職に就くことが出来た。そしてその直後にエリスは豊太郎にエリスの家に居候することを提案しているが、「彼はいかに母を説き動かしけん」とあるように、エリスが母を説得した方法が分かっていない。

しかしこのとき、もしエリスが母に「豊太郎が職に就くことが出来たから、その給金で私達も養ってもらおう。」と言ったならば、貧しい二人の暮らしにわざわざ豊太郎を迎え、二人の暮らしがもっと苦しくなるような真似を母が許した理由になる。

エリスは豊太郎を居候させて豊太郎の暮らしを助けようとしたのではなく、逆に豊太郎にエリスと母の暮らしを経済的に支えてもらおうとしたのだ。

豊太郎と出会った頃には、「我をば救ひたまへ。」などの、曖昧で軽い要求しか言わなかったエリスだが、子供ができたと判った途端に「よしや富貴になりたまふ日ありとも、

我をば見捨てたまはじ。」や、「よしやいかなることありとも、われをばゆめな捨てたまひそ。」と見捨てるなという言葉強調し、「生まれたらん日には君が正しき心にて、よもあだ名をば名のらせたまはじ。」と、豊太郎が今さら自分の子供ではないと言い出さないように念を押している。

このエリスの一連の発言の理由は、エリスに子供ができてしまえば、もうほかの男と付き合っ、暮らしを支えてもらうことができなくなるので、必死で豊太郎を繋ぎ止めようとしたからだといえる。

そして相沢がエリスに、豊太郎が日本へ帰るということを伝えたとき、もしエリスが豊太郎を愛していたなら豊太郎が日本へ帰ることを悲しむはずだが、エリスはまず「我が豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺きたまひしか。」と怒り罵った。

これはエリスが豊太郎に対し何度も自分を見捨てないように念を押していたのにも関わらず、最終的にはエリスは豊太郎に裏切られたので、「このままずっと豊太郎と暮らしていけば、自分と母は養ってもらうことができ、自分は二度と嫌いな踊り子の仕事をせずに済む。」というエリスが外れて怒ったのだ。

では、なぜ豊太郎愛していないはずのエリスが相沢の話聞いて狂ってしまったかというと、エリスは豊太郎ではなく生まれてくる子供のことを深く愛していたからだ。

「幼しと笑ひたまはんが、寺に入らん日にはいかにうれしからまし。」と言ったり、子供の生まれるずっと前からおむつを作っていたりという行動から、エリスは子供が生まれてくることをとても心待ちにしていたことが分かる。

しかし相沢の話聞き、豊太郎への怒りと自分ひとりの収入で大切な子供を守り育てることができるのかという不安が頭をよぎって精神に一気に重圧がかかり、妊娠していて精神的に不安定だったエリスはその重圧に耐え切れず狂ってしまったのだ。

以上のことから、エリスは初めから豊太郎のことは愛しておらず、貧しい一家を支えてもらうために利用しただけで、本当は支えてくれる男なら誰でもよかったのだ。